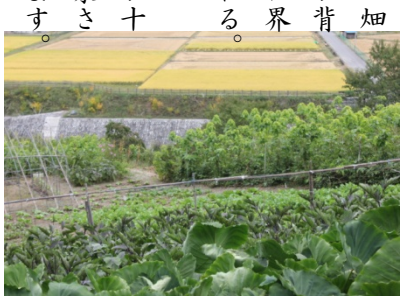
大鹿スケッチ

第 47 号
2014 年
09 月
〈　発信者　〉
前志満　くみ
〈　提供　〉
旅舎 右馬允

朝、ナスを収穫する。背中に冷たい滴が落ちる。ナス畑の後ろにはサトイモの畝を背負っているのでその白露が背中に落ちるのだ。サトイモの葉っぱに集約されている世界をのぞいてみれば秋の空、田んぼの黄金色が映し出される。まるですべてがそこにあるような。

大河原の堂垣外（どうがいと）の田んぼの刈り入れが十五日から始まりました。今年は日照時間が少なく、農家さんも稲刈りの日程を決めるのに、ひと思い巡らせています。



伊那谷における「狼信仰」②

大鹿村鹿塩沢井（さわい）に通称「ナベッカブリ」という地籍がある。ここに三峰様が祀られている御洞がある。集落の人に聞くと毎月「九」の付く日、つまり九日、一九日、二九日にお明りをあげるという。かねてからなぜ「九」の付く日にお明りをあげるのか気になっていた。今年の5月豊丘村堀越にある三峰神社の分社を訪ねたときにその謎が明らかになった。（第四五号七月号のつづき）

狼信仰見聞その一
「なぜ九の付く日に祈りをささげるのか」

堀越の三峰神社の開祖堀本丈吉（安政元年生まれ）は、十二、三の頃、木曽御嶽行者について神道の業法を学び、一生を修験者で過ごした。明治十九年丈吉は前人未到の荒川岳を開山している。参謀本部の地図のできる一年前だった。

堀本ヒトミさんがお姑さんから伝え聞いた話によると、丈吉が荒川岳に向けて家をでたのが八月の頭頃だった。留守番をしていた奥さんは神棚に毎日、無事を祈っていたという。そんなある日、いつものように祈りをささげていると柏手の音がきこえたそうな。この日、丈吉が荒川岳に登頂を果たし祈りをささげていたという。荒川岳の山頂で柏手を打ったのが聞こえたのだ。

八月九日の事だった。それ以来三峰様をお参りするのは月の「九」の付く日ということになっているらしい。

狼信仰見聞その二
荒川岳開山と「迎え犬」

修験道では、山の神を中心として魔物的なものを含め、あらゆる霊が山中に漂っているとされている。そういう霊に遭遇しながら山頂に至り、御来光を仰ぐことによって修験者は大きな験力をえるとされていた。

一生を修験者としてさげた丈吉も修験の一環で荒川の頂を目指した。

単身で、そば粉を少量を携えて大部分は人跡もない赤石連峰荒川岳へ。

小渋川を渡り、赤石岳に至り、東岳、中岳、前岳をきわめて開山は決行されたというがその道中に「迎え犬」の存在があったという。

「迎え犬」というのは、いわゆる狼の事だ。荒川への前人未到の道のりは狼が先導してくれたという。「迎え犬」は人間よりも道の一かど、一かど先へ出るものと言われ、人のとの距離が大分離れると、道に犬つくばいして待っていて、人間が近ずくとまた前に進むというもので、山の尾根道でかつては経験されていたようだ。

堀越の三峰様の「そもそも」

そもそもこの三峰神社は文化文政（江戸時代後期）の頃、堀越耕地が猪、鹿、狐などの獣除けのため、武州（今の秩父）三峰山から分霊を勧請して祠を造り、祀り始めたのが年を経るに従い荒廃の一途をたどるのみだった。そんなある年、堀越部落に悪い病が発生し死者が続出した。この時、丈吉は霊薬を手に入れ与えたところ、これが効験顕著で悪疫はたちまち止まり感謝の的となった。おそらくその薬は木曽御嶽の秘伝薬であっただろうが三峰様の霊験として荒廃にまかせてあった三峰様を再興することになった。村民もこのお祭りを怠った祟りで悪病が流行したと考え丁重なお祭りをするようになったと言われている。

大鹿村と三峰様

ものの本によると、那谷では信仰の厚い狼神社は、上伊那郡では埼玉県にある三峰神社、下伊那郡では静岡県にある山住神社であるといわれている。大鹿村の場合、秋葉街道筋で繋がることを考えると一番近い水窪の山住神社が信仰されるような気がするが、実際には埼玉県のよう三峰様が信仰の中心にある。秩父地方から伝わったとされるものは他に「大鹿歌舞伎」もあげられる。

狼と歌舞伎の共通点は何かあるのだろうか。

大鹿 HeatBeat
～大鹿の人々～　第 45 回
紙谷　正　さん　(88)

季季節ごとの風景と共に大鹿人の生活をご紹介します。淡々とした日々の中に熱く響く「鼓動」をお届けします。

九月十九日、紙谷さんを訪ねた秋蚕様の上蔟だった。気温が低かった影響で予定より二日遅かったという。十分に栄養を蓄えたお蚕様は桑の枝の上で待っている。上に網をかぶせ、上がってきた彼らを上蔟機のある部屋に運ぶ。「お蚕守の猫」さくら様が出迎える。「なぁーー」（よくふとっとる、なかなかよいできじゃよ）といっている。お蚕様を運びだしたらあとはお蚕様任せ。続いて稲刈りが始まる。周りの命に寄り添いながら次々にそのエネルギーを巡らせ、繋いでゆく。

今年は山の案内を頼まれることがパラパラと舞い込む。八月下旬、地元の地質学者M先生の依頼で小河内沢上流をご案内した。M先生はいつもにこやかな表情で地質のことや、山登りのことを教えてくれる。その上、地元の自然観察会を精力的にこなし、執筆活動にも尽力されているスーパーおじいちゃん先生だ。八三歳になるM先生は足取りはゆっくりだが、しかし確実な一歩を重ねて山の急斜面を登り、沢を渡り、急峻な渓谷を這い上がる。体力を上回る精神力の強さには脱帽である。これは戦中、戦後を経験し、極端な転換を迫られた世代の強靭さだろう。

小河内沢の支流、小日影沢には仏像構造線の露頭がある。小河内沢のわかされからしばらく石灰岩の川底を進むが、ある地点から泥・砂岩になる。この地質境界が仏像構造線。様々ある構造線（地質境界）にはかつて地中でかかった「力」の特徴がみられるという。この日は「キンクバンド」という仏像線のエネルギーリズムを教わった。収曲があり跳ね返ったような揺らぎが見られた。